

エコエコアザラク

眼

Night 03

赤い部屋

第二稿

脚本／小中千昭

Teleplay by Chiaki J. Konaka

2003／11／01

登場人物

黒井 ミサ(18)

田上 寛(38)……………興信所嘱託調査人

山中 博美(22)……………ナレーター・コンパニオン

伊澤 亮子……………『赤い部屋』ママ

ミュキ……………同 アクトレス

リンダ……………同 アクトレス

リリー……………同 ミストレス

梶山 藤治(25)……………KJ探偵社取締役

萩原 文哉(28)……………月刊アイズ記者

須田 薫(17)……………南淵高校三年

宮田由比奈(15)……………同 一年

岸田 嘉彦(17)……………同 三年

「スズキ」(仮名)

黒ビニール袋を被った男(三人／台詞無し)

○ホテルの部屋／ビデオ画面

不自然なアングル。サイド・ボード上に置かれたバッグの中に仕込まれた隠しカメラの映像。
シテイ・ホテルの一室。ベッドの縁と、奥にドアが見える。

呼び鈴が鳴る。

男（顔は見えない）がカメラの入ったバッグの位置を微調整し——、ドアに向かう。

入ってくるOL風の若い女。やや大振りなバッグを肩に下げている。

女 「スズキさんですか」

男 「どうぞ」

女、室内に入ってくる。

女 「『赤い部屋』から来ました、ミュキです」

男 「よろしく」

ニッコリと笑い、バッグを下ろすミュキ。

ミュキ 「じゃあ、先にシャワー浴びてきて貰えますか？」

男 「あ、ああ。じゃ——」

男、バス・ルームへ。

ミュキ——、作り笑みを止め、部屋を見回しながらポケットからガムを出して口の中へ放る。

シャワーの音が聞こえ始める。

ミュキ、バッグから彼女の「衣装」を出そうとして——、ふと視線を感じる。

警戒した顔で室内を見回すミュキ——、カメラの入ったバッグの存在に気づく。

無表情にレンズ前に顔を近づけ——、噛んでいたガムをレンズにベッタリと貼り付ける。

○台場

東京の新しい風景。

生活感の無い景色の中で、ミサは立っていた。

ダラリと手に下げた兎のバッグが、彼女の孤独を際立たせている。

ミサ、海の方に振り向く。

レインボー・ブリッジを向こうに望む、台場の風景。そこに——、幻の様に巨大な「門」が浮かび上がる。グロテスクなゴシック様式の如き、二つの尖塔を頂く、巨大なる門——だが、霧の中であってそれは明確に見えない。

いや、そもそもそれは「未だ」そこに存在してはいないのだ。エジプト魔術の眼の紋章が大きく掘られたその門の幻影は、ミサが見た未来の記憶なのか。ミサは、胸を騒がせているものの正体を探りながら、既にその幻影を消した海を見つめていた。

○KJ探偵社

ぼうっ、と思案していた田上——。

▼前話フラッシュ／ミサとすれ違う田上。

田上——、徐に机上の行方不明者ファイルの山を崩し始める。

田上「——（呟く）絶対に見覚えがある——」

と、ドアから入ってくる経営者の梶山と、若い男。

梶山「（男に）——いやまあ、ウチとしちやある意味、ビジネス・チャンスっていいですかね——（田上に気づき）あっ、田上さん来てた。助かったよ」

田上、振り向く。

梶山「この人ね、月刊アイズの記者で——」

男「（名刺を出しつつ）萩原です」

田上「——どうも——」

梶山「田上さん、取材したいんだってさ。ちょっと話ししてあげて下さいよ。いいでしょ？」

田上「自分を……？」

アルカイックな笑みを浮かべている萩原。

○ホテルの部屋／ビデオ画面

グラグラと揺れている映像。
レンズは、後ろ手に縛られ、目隠しをされて床に跪
いている男を見下ろす。

ミュキ 「(オフ) こんなものを撮っておいて、後でマスでもかこ
うと思っていたのかしら？」

男 「——すまない——」
黒革に包まれたミュキの脚が、男の肩を小突く。

男 「(ヒールのもたらす痛みに呻き)」

ミュキ 「(オフ) 口の利き方、まだ覚えていないのね」

レンズは男の顔を接写する。

男 「——申し訳ありませんでした」

ミュキ 「(オフ) 勝手にルールを変えていい筈がないわ。そうで
しょう？」

男 「はい……」

ミュキ 「——このテープ、あなたの家族に見せたらどうなるかな
あ……？」

男 「……」

ミュキ 「あなたの部下でも面白いかもしれないわね」

男 「——」

男は最悪のケースを想像している。

と、画面激しくぶれ、再びサイド・ボードの上に転
がされる。

傾いだアングルの中に、ビザールな衣装をまとった
みゆきが映る。

ミュキ 「——しないわ……。それはルール違反だから……」

男 「——(安堵の吐息) ——キスを、させて下さい」

ミュキ 「——(男を無表情に見下ろす)」

男 「お願い、します……」

ミュキは考えている。

○街

東京の街の情景モニタージュ。

昼間、トワイライト、夜——。

喧騒と閑散。

時間が早く過ぎる場所、遅く流れる場所——。

そして、それらの情景の中には必ず、「翳」がある。その翳の中には、人の形をした影だけの存在が蠢いている——。

○南淵高校／校舎裏／午前

二話で薫が見ていた壁のシミ——

○同／玄関

宮田由比奈が来る。と、反対側から来た男子生徒を見て、ハッと緊張。痩せた色白の、死化粧が似合いそうな端正な顔立ちに、頹廢的な雰囲気漂わせる美青年——三年生の岸田嘉彦だ。

横を通り過ぎる岸田。

由比奈「(ペこっ)先輩、おはようございます」

岸田「やあ」

通りすぎていく岸田。と、その先の教室から薫が出てくる。岸田、それを呼びとめ、

岸田「須田薫さん」

薫、振り返って岸田に気がつき、ハッとす。ペコッと頭を下げる岸田。

岸田「この前のこと、考えておいてくれた？」

薫「あの、でも私なんか……」

岸田「僕には君が必要なんだ」

見つめる岸田。薫、困惑。

由比奈、その様子を嫉妬の眼で見つめる……

○同／校舎裏

——壁のシミ、じわっと濃くなった様に見える。

○渋谷／宮下公園（場所不拘）／午後

ミサと、若い女が見つめ合って立っている。

ゴスなスタイルの女は怒っていた。

女 「（一気に）あんたどういうつもりか知らないけどいきなり勝手に人のあとつけて来る？普通！」

ミサ「——」

女 「——（小首を傾げ）前にどっかで遇った？」

ミサ「（いいえと首を振る）」

女、ミサが持つビケちゃんを一瞥——。

女 「——かしんじじゃないの？このガキ」

ミサ「——」

女、ぷいとミサに背を向け、歩きだす。

ミサ、そのあとを歩いていく。

○ビル屋上（乃至非常階段踊り場）

紙コップのコーヒーを両掌で包む様に持ち、遠くを見つめている田上——。

田上「——何で、（やや意識した一人称）俺に話を聞こうと思っただんですか……」

萩原「（うそぶき）いや、所長さんの推薦でして」

田上「俺は社員じゃなく嘱託だし——」

萩原「ええ。でも、人探しのプロ中のプロって聞きました」
田上は無意識に、萩原に顔を正対させる事を避けている。

萩原「——それに……、田上さんは、こっちの勝手なアレですけど、親しみみたいなものを感じてまして」

田上は、恐れていた事が的中し、顔を強張らせる。

萩原「——カマかけんの、やめます。そういう駆け引き、苦手なんですよね、僕」

田上「——」

萩原「――田上さん、本庁の機捜隊いたんでしたよね」

田上「――」

萩原「何で――、あんな事したんですか？」

田上「――」

萩原「リストを業者に流したところで、得られる金なんてたかが知れてたんじゃないんですか」

田上「――警察が、大嫌いだったからさ」

萩原「（虚を衝かれ）えっ？」

田上「――それでも言えば、あんたは納得して、もうその話題をしなくなる」

萩原、ややしてくくくと笑い始める。

田上「――（呟く）理由なんて、無かったさ……」

田上、眼を直下に下ろす。

コンクリートの奈落。

じっとそれを見つめる田上の、眼。

一瞬、奈落に急降下するかの様な視野狭窄のヴィジヨン――。

眼を閉じている、田上――。

○『赤い部屋』

外国人向けなのか、広い間取り、高い天井のマンションの一室。

真紅の斜光カーテンが閉じられ、胎内の様に空疎な室内は、香炉から立ち登る薄い煙に霞んでいる。

大きな真紅のソファの隅に、ちよこんと座っている少女の頭、腕には包帯が巻かれている。

スツールに座っている、その部屋の主、携帯電話で通話をしている。

亮子「――（微笑）ウチのアクトレスは左様な粗相はいたしません。御心配は無用です――」

亮子、ソファに座っているリリーに微笑する。

リリーはただ、顔を亮子に向けるのみ。

亮子「――ええ――。御紹介された方は、誰だって私たちがお

もてなしいたします」

鉄扉が開く音。

亮子「では、御免下さいませ（通話オフ）」

と、部屋に入ってくるゴスなスタイルの若い女。

亮子「リンダちゃん、おはよう」

リンダ「ちょっとママ聞いてくんない？」

無然と亮子に訴えようとするリンダ。

亮子「（優しくたしなめる様に）リンダちゃん」

リンダ「——ママ、聞いて下さらない？」

亮子「——（何かを察知し、僅かに反応）」

リンダ「——（眩く）誰かしら……」

ガチャン。ドアが開く音。

リンダ、覗きに行く——

リンダ「あっ！ あっ、あっ、あんたこんなとこまでっっ！」

亮子、微笑し、俯いたまま。

亮子「お客様？」

室内に入ってくるミサ。

リンダ「客？ 違うってば！ このガキ、いきなりあたしを睨み

つけて、ずっと後追っかけてくんのお！」

亮子「リンダちゃん？」

リンダ「（焦れったく）後追っかけて来るんですっ、ていうかス

トーカー？」

亮子、立ち上がり、ミサの前に立つ。

亮子「——怖い眼で見ないで」

ミサ「——」

亮子「——人はね——、見るという行為で人を呪う事が出来る

のよ」

『呪う』という言葉に、一瞬反応するリンダ。

ミサ「——バジリスクの眼——。でも、私はそんな事はしない」

亮子「（軽く驚き）——（微笑）」

ミサ、やや珍しげな表情で室内を見回し——、リリ

——と眼が合う。

ミサ「——」

リリ「（軽く小首を傾げる）」

亮子「——リリーちゃんよ。あなたの名前は？」

ミサ「ミサ——。黒井、ミサ」

亮子「お掛けなさい。お茶を煎れてあげるわ」

ミサ、一瞬躊躇するが、リリーの座るソファに向かう。

リンダ「は ママは まさかこのガキ、ここに！」

亮子「お客様なんだから、おもてなしするだけ」

リンダ「有り得ない！」

リンダ、バッグをひっ掴み、飛び出していく。

ミサ、後を追おうとするが——、ぐっ、とリリーに裾を掴まれていた。

ミサ「！」

亮子「(少し嬉しそうに)リリーちゃん、あなたの事が好きみたいだわ」

包帯の奥の瞳が、じっとミサを見つめている。

ミサ「——」

リリー「——」

▼映像制作会社会議室／午後

雑然と段ボールが罪上がった壁を背に、やや緊張した表情で座っている博美——。

博美「(カメラに向かい)——私は——、ずっと子どもの頃から、何だか人に見られるっていうのがすごく嫌いだったんです——。(微笑)変、ですよ。なんか、人に見つめられると、何か私の中のものが消えてく——みたいな感覚っていうか——。だけど——、段々、もっと見られたいっていう気持ちに変わって——」

博美の前に座っている三人の男たち。すっぽりと黒いビニールの袋を頭から被り、眼だけを覗かせている。それは抽象化された、博美にとっての、他者。

○夜の街

喧騒の街中を、足早に歩いていくリンダ。
何かをブツブツと口の中で呟き続けている。
その、口元——。
呪詛の言葉——。
なまめかしく動き、それを吐き続ける唇——。

○赤い部屋

空気がどんよりと重いのは——、香炉から漂い出る
煙のせいばかりでは無い。
何か強いハーブの作用が、ミサの意識を少し混濁さ
せている。

虚ろな眼で虚空を見つめているミサ——。
かちゃん——。ミサが手元に置いていたティー・カ
ップが床に落ちる。
傍らのリリーは、再び置物の様にじっと前を見て座
っている。

と——、ミサの目の前に黒い短剣の唾先が突きつけ
られる。

ミサ「——（見上げる）」

妖艶の笑みを浮かべ、片手に背中の開いたビケ、そ
して片手に短剣を持った亮子が立つ。

亮子「これで、誰かを殺した事がある？」

ミサ「——それは——人を危める道具じゃ、ない……」

亮子「——（短剣を自分に引き寄せ）——そうね……。これは
アサメイ——。儀式の為の剣（つるぎ）」

ミサ、やや混濁した意識の中で、亮子が何者である
か見極めようと、必死に見つめる。

亮子「——興味あるな……。アサメイをこんな可愛いものに入
れて持ち歩くなんて——、あなたは一体だあれ？」

ミサ「——あ——あなた、こそ……」

亮子「——（微笑）ひよっとしたら、あなたと同じ——」

ミサ「——?」

○高速道路高架下

小さい店舗の軒先で、失踪者のファイルを店主に見せ、話を聞いている田上。

やや背後で、それを見つめている萩原。

田上「———そうですか……。すみません。ありがとうございますました」

収穫無く、店を出る田上。

川沿いの遊歩道を、手帳に何か書き付けつつ歩く田上。萩原、脇に来て———

萩原「人探して、もう少し効率的な方法があるかと思ってました」

田上「ネットを使ったりとかか？ ある程度の絞り込みにはそういう手段もあるが、結局は脚で探すのさ」

萩原「———田上さん、この仕事、楽しんでます？」

田上「———あんたは、自分の仕事、楽しいか」

暫く黙って歩く二人。

田上「———人が消えるなんて、10人が10人、みんな事情も状況も違う。俺が受けてる仕事は、割と傾向が似ているが、だからって今のこの東京がおかしくなってる原因なんて判りゃしない」

萩原「———ええ、そうでしょうね」

田上「———じゃあ、何で俺を選んだ」

萩原「———人を、探して貰いたいな、って思って」

田上「仕事の依頼か？ 逃げたあんたのかみさんか？」

萩原「———仕事っていうか、僕は調査費なんて出しませんよ」

田上「———」

立ち止まり、萩原を見つめる田上。

田上「誰を探したい」

萩原「僕です」

田上「———」

真意を計りかねている田上。萩原は無表情に田上を見据えている。

○繁華街裏手

通い慣れたクラブに向かって歩いていくリンダ。歩きながら煙草に火を点けようとしているが、ガスが切れているらしく点かない。立ち止まり、苛立たしげに幾度もフリントを擦る。執拗に、幾度も、幾度も——。その唇は呪詛を呟き続けている。ズン——。突如重くなる空気。筋向こうの大通りの喧騒が、急にフィルターがかったたくぐもった音声になる。

リンダ「——（緊張）また……？」

○赤い部屋

ソファにもたれ、眼を閉じているミサ——。ふっ。香炉の火が、何処からの風に吹き消される。そのミサの頬に、そっと黒く艶やかな、ラテックスに密封された亮子の指が這う。

亮子「——あなたは、誰？」

ミサ「（眼を閉じたまま）ミサ——」

亮子「——あなたは、何？」

と、ミサ、鋭い光を湛えた瞳を見開き、亮子を見据える。

ミサ「——魔女」

亮子「——」

ミサ、立ち上がる。

亮子、アサメイを持ったまま、立ち竦む。

ミサ「——あなたは？」

亮子「——私は——、亮子——、伊澤、亮子」

ミサ「——そしてあなたは？」

亮子「——私は——、この『赤い部屋』の主人」

ミサ「——あなたは何をしているの」

亮子「——私は——、男の人に、夢を見させる魔女」

ミサ「——（微笑む）」

亮子「——？」

ミサ「——夢を見させるなんて、素敵だね——。そういう魔女に、私もなれるかな……」

亮子「——あたしには、多分あなたにとっても敵わないけれど、少しは事を識（し）る眼がある——。でも、あなたはどうしても近い時の記憶を見せてくれない」

ミサ「——だって、無いのだから」

亮子「え……？」

ミサ「——今までの一年間の記憶が、無いの」

亮子「——そっか……。だからなの……」

ミサ「そんな眼を持っているあなたなのに——、さっきの人がとっても危険な事をしているの、どうして止めなかったの……？」

亮子「——リンダの事？——それは……、あの子がそれをするだけの権利があるからよ」

ミサ「——」

○繁華街裏路地

何かに追われる様に走るリンダ。

亮子「（オフ）あの子がこの部屋に来る前、あの子はそれしかしていなかった」

はあ、はあ、はあ——。必死に走るリンダ。

亮子「（オフ）この街に呪詛の言葉を吐きつけるという事——。あの子は、そうするだけの権利があった」

ゴスなスタイルのリンダ、その装飾鎖が彼女の脚に絡まり、冷たいアスファルトに倒れ込む。

リンダ「あうっ！」

○赤い部屋

リリーの膝に頭をもたれさせ、ソファに横になっ
ている亮子。

リリーは亮子に触れようとしな

ミサ「——この街を、呪う権利？」

亮子「——あの子はほんの幼い頃から、あの子の父親と、あ
子の兄に痛めつけられてきたの……。残酷でしょ？」

ミサ「——」

亮子「あの子は黙っていた。そうする事で、あの子のすぐにて
も壊れてしまいそうな家庭——、見せかけの愛、見せか
けの平和が続くと思っていた——。でも——、あの子が
信じたがっていた母親も、自分の夫と息子が何をしてい
いるのか、最初から知っていたの……」

ミサ「——」

亮子「あの子は、自分を産み落としたこの街そのものを呪って
いるの……」

ミサ「——だけど、それはとてもあの人にとって危険な事」

亮子「——そうかもしれない。だけど、でも、あの子にはそう
する権利が、あると思うわ……」

亮子、眼を上げる。

ミサの姿、もうそこにはない。

リリー「——」

○地下駐車場（場所不拘）

逃げ込んでくるリンダ。

そこならば、人工の光がある——。

安堵し、息を整えているリンダ。

だが——、光は翳をつくるもの。

いつしかリンダは、翳が取り巻く中央にいた。

その事に気づき見回すリンダ。

翳の中に、影が蠢き始める。

リンダ「二三」

翳に落ちている壁から、むっくりと影が染みだす様
に抜け出してくる。

リンダ「（悲痛）あたしがあんなたちに何をしたらって言うの？」
リンダの不明瞭な叫びは反響し、その場でぐるぐると渦巻く様に残る。

影——、人の形をした、しかし確実に人ではない者たち。

抑揚の無い顔には、ただ淡い光点だけの双眸。

その者達がリンダを追い詰めていく。

いつしかリンダは粘液の様などす黒い空気に取り囲まれている。それが光を閉ざし、音を失わせていく。

リンダ「やだああ！！ ヤダアアアアアアアッッッ！！」

ふっ、と静寂。

ミサ「ウリアル・セルフィム！」

リンダ「！！」

いつの間にか、リンダのすぐ前に立っているミサ。

ビケの腹部から、サッとアサメイを取り出し——

ミサ「イユボテスタ！」

ミサ、アサメイでペンタグラムを虚空に切る。

ミサ「ガラテイー！ ガラタアア！！」

ブンン ソニックブームがミサから同軸円心状に広がる。

獣の様な断末魔をあげ、ミサの魔術によって消滅させられていく影たち——。

○赤い部屋

ミユキ、入ってくる。

室内にはリリーがいるだけ。

みゆき「ただいま——。あれママは？」

リリー「……」

○地下駐車場

ミサの脚に縋りついていたリンダ、事態が把握出来ず、おどおどと周囲を見回している。

リンダ「——今の——、また来る……？」

ミサ「あなたが呪いを続ければ」

リンダ「——あれは、幽霊……？」

ミサ「影はラルヴァ。不浄の地に現れ、死んだ者の魂を糧（かて）に這いずる悪しき魂」

リンダ、震える事をやめ、眩しそうにミサを見上げる。

ミサ「——この街は、変わってきたの……。呪いが力になってしまふ……。だから、もう呪詛の言葉は吐かないで」

リンダ「——」

○高速道路高架下／過去時制

田上「何の、冗談だ」

萩原「——（ニツ）そう、冗談です。ただ、そうでなくなるかも、しれないっていう」

田上「——」

萩原、片手を上げ、先に歩いていく。

萩原「——（オフ）僕は失踪なんかするつもり、無いんです。でも、もしそうになったら——」

田上「——」

萩原「——（振り向き）田上さん、僕を、探して下さい」
田上「——」

○KJ探偵社

夜、他に人のいないオフィス。

バン！ 引き出しを蹴り閉じる田上。

と、それが引金になったかの様に、地鳴り。そして、ロッカーのガラス戸がガタガタと音を立て——、

田上「！」

机上に積まれていたファイルが床に崩れる。

弱い地震、収まった。

瞼を指で抑え、眼圧の痛みを堪える。

田上「――（呟く）自分を探せだ？……ふざけやがって……」
暫しその姿勢でいたが――、小さく吐息をつけて床に落ちたファイルを黙々と拾い始める。
と――

田上「！」

どこかで見たという記憶のある、少女――。

田上「こいつだ！」

それは紛れなく、ミサの顔写真が貼り込まれたファイル。

だが、その氏名欄には――

田上「――（呟き）四方田（よもだ）千砂……」

そして「失踪日／2002年7月」

田上「一年半も、何してたんだこいつ……」

○台場／夜

ひよおおおんんんんんん

潮風が、まるで海獣の咆哮の如きに響きわたる。

レインボー・ブリッジを向こうに、東京湾の入り口にそそり立つ幻影の門。

浮かんでは消える、闇の中の蜃気楼。

それを見上げていたミサ――、街灯の方に向かって歩きます。

ミサ「（オフ／謳う様に）エコオ・エコオ、アザラーク……。エコオ・エコオ・ザメラーク……」

以下次回